

## 1 意味をつくる営み

### (1) 子どものつくる意味

#### ○ ことばのひろがりや深まりについて

詩作を通じて思考に即したことばを生みだそうとしたり、詩を通じて多くのことばにふれ、他者の表現を受け止めたりする中で、ことばはひろがっていく。

ことばを内言で思考して探し、外言として再構成することで、思考力や表現力が養われる。また、自分の使わないことばや表現技法を浴びることで、言語やその背景にある言語文化につながるができる。

書く、読む、聞く、話すことが一体となった詩作、鑑賞活動を行う中で、発信とフィードバックから言語による表現や感覚は磨かれ、鋭く豊かになっていく。

たくさんのことばや表現とつながることで、『自分の思いを伝えるために、ことばを繰り返すとよい』『ことばにしたら、自然に心地よいリズムになった』などの意味をつくる。

#### ○ 人・もの・ことへの見方やとらえ方について

詩作は、対象や自分を見つめ、人・もの・ことへの見方やとらえ方をひろげる。自分の心の動きを自由な形でことばに表す行為は、対象である人・もの・ことを通して自分を見つめ直し、体をくぐり抜けた実感あることばを生み出していくからである。他者の詩を味わうことは、作者の視点で対象を見つめ、感じ考えたことを想像しながら追体験する。詩を味わうことは、ことばを介して作者の思考とかかわる行為となる。

3年生におけるもののとらえと表現を考えたとき、あった事実を基にした時系列での表現になりがちである。まだ、主観的かつ一面的な見方をしがちな3年生に、様々なものとあわせてことばで表現する場を設定することで、見方やとらえ方をひろげていくと考える。

具体物をモチーフにした詩作は、対象へのとらえがまずあり、経験を基にして想像をひろげた思考がことばとして表れることが多い。対象のとらえを言語化することで、自分の対象への見方やとらえ方を確かめたり、ひろげたり、深めたりする。

多様な見方、とらえ方ができる抽象的な表現とことばとあわせる詩作は、色や形から得た発想を自由にひろげ、自己の心象や、想像を膨らませた対象へのとらえを投影した表現となり得る。

抽象的な表現を基にして、想像をひろげて詩を詠み、味わうことは、『墨を流したただの模様からもたくさん

の物語を創造することができるんだ』『自分は飛び散った水玉模様から、雨と梅雨を感じたけれど、友達はさみしさを感じるなんて、人によってイメージすることは違うんだ』などの意味をつくり、人・もの・ことに対する見方やとらえ方をひろげていく。

## 2 本時までのいみをつくる営み

### ○ 子どもの思いや気付きから活動をひろげる

これまで、子どもが読んで気に入った詩作品、読みの中で見付けた作品の技法や表現の工夫を、詩作帳「ことのはの音」に書き貯めてきた。それらの詩を紹介し、共有して、子どもとともに日記的なもの、イメージ的なものなど、詩を類型化したり、技法や表現方法を取り上げたりしてきた。子どもの作品や子どもが見いだした作品を教材にすることで、子どもの言語感覚に寄り添い、主体的にことばとつながり、ひろげ、自ら生活の中で言語文化にかかわっていく。

### ○ 出来事とことばをあわせる

子どもは春から、経験した出来事や心の動きを詩に表現してきた。思いを詩にしたとき、子どもは自然に声に出して読んだり、絵を添えたりしている。

詩作は、音読・朗読や絵に描くこと、写真に撮ることと同様に表現の一つである。子どもは思いや考えを素直に表現し、誰かに伝える中で賞賛されたり感想を言い合ったりすることを楽しんできた。自分の思いを表現したいという人間が根源的にもつ欲求を、3年生という発達の中で目いっぱい発揮している姿といえる。

表現することへの意欲を高められるよう、伝えたい思いや自由な発想を認めるとともに、作品や意見の交流を行ってきた。

### ○ 写真とことばをあわせる

心が動いた時に子どもが撮った写真を基に詩作をする経験をしてきた。自らが撮影した写真とことばをあわせることで、具象的、説明的に撮られた被写体の裏にある思いや考えを違う視点で表現したり、見るだけでは何かわからない抽象的に撮られた被写体を表現したりしようと詩作してきた。写真は、空間や時間を切り取る行為である。多くの場合、視覚的に具象が示される。限られた空間、時間が切り取られた写真とことばをあわせる中で、実際にあったことを基にした日記風な詩、写っていないものに想像をひろげて物語風に綴った詩が生まれてきた。表現の中で、直接的に、または比喩的に子どもの思いや考え、様々な人、もの、

ことへのとらえがにじみ出る。作品交流をする中で、子どもはことばの世界をひろげるとともに、ことばを通して世界をよりひろげたり、深めたりしてきた。

### ○ 抽象表現を基に想像をひろげことばとあわせる

本活動では、子どもがモダンテクニックで偶然生み出した模様をモチーフにして、詩作する。子どもは、スパッタリングやマーブリング、シャボン絵、ビー玉絵、スタンプなどの行為や表現を楽しんできた。

その中では、「これ、鳥に見えるね」、「花火がたくさんあがっているみたい」など、形や色、自分の思いを基に想像をひろげ、自然にことばが紡がれていく。写真に比べ、モダンテクニックから生まれた模様は一層偶然性、抽象性が高い。モチーフそのものに対する説明的、機能的なことばから思考が飛躍しやすく、より自由に想像の世界をひろげ、思い、考えをことばで表現することができる題材であると考えられる。

模様の色や形を基に見えたものをきっかけにして、メモやウェビングなど自分が選んだ方法でひろげて言語化していく。模様から発想したイメージと子どもの経験、思いや考えを行き来させる過程を経ることで、ことばや見方、とらえ方をひろげ、感性や思考を豊かにはたらかせる姿を期待する。

## 3 本時について

### (1) 本時における子どものつくる意味

知らないうちに真似されている表現をどう考える

かを考えることを通して、『人の作品を無断で真似するのは作った人が悲しい』、『参考にする時には、相手に聞いた方がよい』といった意味をつくる。

子どもは、真似された作品や表現が似た作品について考えることを通して、著作者である自分の作品を大切にしたい気持ちと、お互いに相互作用しながら詩作をしている自分の現実との双方を行き来する。双方の思いを大切に考え、情報発信をする際に気を付けることを確かにする。

### (2) 展開の視点

本時では、真似された作品や表現が似た作品を提示して考えをつくる。子どもが自分事にして思考するために、次の2点を大切にする。

1つは、実際に今まで子どもが詩作した写真詩を基に考えることである。写真詩は、ファインダーをのぞいて動いた心を、時間と空間で切り取った写真、そこにあわせたことばの双方が組み合わせられて成り立つ。2つの著作物それぞれを少し変えたり、無断で使ったりしている例を提示し、自分だったらと著作者の気持ちに思いを馳せる。

2つは、真似されて嫌だと思う価値観も多様であることに気付くことである。人によって、感覚は違う。多様な人間がいる集団の中で、お互いがいやな思いや不利益を受けないために、どうしたらいいのかを考える中で、許諾を取るという思考が促されることを期待する。

### (3) 展開 (65分)

時間	番号；子どもの活動 ・；子どもの姿	○；教師の支援
20	<b>1 前時まで子どもが創作した詩を基に無断で使用した写真や表現を真似した詩について考える</b> ・写真を撮った子どもの許諾を取っているかどうかを問題にして話しあう。 ・写真をトリミングしたり、色を変えたりしたものの使用について話し合う。	○ 作品を拡大印刷して黒板に貼り、感想交流をする。 ○ 問題ないと思うか、問題があると思うか、どちらともいえないかの立場をはっきりさせた上で根拠を述べ合う。
35	<b>2 表現として同じ言葉が含まれる詩作品をどう考えるかを交流する</b> ・プチプチという言葉が同じでも、内容が違っていればいいのではないかと考える。 ・一緒に作っている中でアドバイスや刺激を受けあうことがどこまで許されるのかを話し合う。	○ 作品を拡大印刷して黒板に貼り、感想交流をする。 ○ 問題ないと思うか、問題があると思うか、どちらともいえないかの立場をはっきりさせた上で根拠を述べ合う。
10	<b>3 今日の学習で考えたことについてまとめる</b> ・ヒントをもらって刺激を受けあうことはいいが、内容や表現を丸ごと真似することはよくないことを記す。 ・どちらとも言えないと思った時には、作った人本人に聞くのがいいと発表する。	○ 作文シートに考えたことをまとめ、何人かに発表させる。